

摂河泉の地域性

——文化の環境史観試論——

岩井宏實

- はじめに
- 一 清流文化
 - 二 湿地文化
 - 三 山麓文化
 - 四 乾田文化
 - 五 溜池文化

論要文旨

一定の地域を対象として、そこにおける自然環境に即応して形成された生活環境をもとに、歴史的に展開されてきた文化の特性を把握して、地域性を考えるさいの一つの指標を求めようとした。その試考として、古代以来先進地域とされてきた畿内のうち、摂津・河内・和泉の地域をとりあげ、それぞれ、清流文化、湿地文化、山麓文化、乾田文化、溜池文化と、五つの文化地域を設定した。

清流文化地域は、摂津猪名川の伏流水、西の宮の「宮水」と称する清流をもとに酒造業が発達し、その経済力の上に文人墨客が輩出、往来し、一つのサロン文化を形成した。湿地文化地域は、淀川左岸の低湿地の氾濫地帯で、そうした条件を克服あるいは適応して独自の営農形態を生み、水路と段蔵と蓮根田という水郷景観をつくり、そうした生業に即応した民具を工夫考案した。山麓文

化地域は、生駒山という聖俗混淆の山と、そこから流れる幾筋もの谷筋において、滝行場という行場とともに水車動力による実利的な生業を生み、それが大坂の町と交流しながら特色ある文化をつくり出した。またここも一つのサロン文化形成の地域であった。乾田文化地域は、大和川村替による新田開発地帯を中心とする、いわゆる乾田砂地地帯で、そこに適応した棉作という商業的農業が展開し、その経営のためにさまざまな畑作道具を考案し、日本の農具の発達をうながした地域である。溜池文化地域は、全国有数の溜池地帯であるが、丘陵、台地、砂地が多く、その条件に適応した蔬菜栽培地帯を形成し、都市部と交流、それに即応した風車をはじめとするさまざまな道具を考案した。

こうした各々の生活環境の形成と、独自の社会・文化の歴史的展開を明らかにし、その特性から形成された地域性を述べるものである。